

「社会参加」の機会保障

－ 視神経脊髄炎患者のソーシャルワークからみえるもの －

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
家族機能・社会臨床クラスター
河内 梨紗

本論では、社会参加の機会について、医療機関を背景に難病を取り巻く生活から考察を行った。視神経脊髄炎を事例に扱い、患者・家族、支援者それぞれにインタビューを実施した。情報提供者の語りから、難病を取り巻く社会の発展に関与している語りと、衰退に関与している語りに分け、カテゴリーを生成した。

分析の結果、患者・家族の難病体験から、〈治らない病〉を包摂できない社会は、個人の苦しみだけではなく、その社会全体の衰退の危機に陥ってしまうこと、支援者の難病体験から、〈社会の器〉の大きさが小さければ小さいほど、〈資源の欠落〉とも相まって、〈孤立を促進〉してしまうことがみえてきた。

難病を取り巻く衰退の語りから、社会全体を見つめる視点と豊かな個別性を見つめる視点を緩やかに往来することが、私たちの社会の発展を示唆していることがよみとれた。